

## 苦悩の日々

43歳 女性

5月の晴天、時間は午後5時頃、

「行ってきます。」

娘は、中学3年生、水泳の選手です。

下校後、練習場所への45キロの道のりはバスを乗り継ぎ、約2時間かけての移動です。

2か月後の大会は、今まで何年も築き上げて迎える県代表として出場予定の大会でした。

この大会を目標として毎日練習に通い、体調管理に努めて来ました。

夏、目前の出来事でした。

娘の交通事故の連絡。「うちの子が？ そんなはずはない…。」誰もがそう思うのではないのでしょうか。

車のハンドルを握る手が震えていたのを覚えています。

「お母さんは傷を見ない方が良いでしょう。」

既に到着して娘の傷の手当てをして下さっていた救急隊の方からの言葉でした。

その言葉通り、ひかれた足首の皮膚は大きく裂け、折れた骨が飛び出していました。

白い靴下は、その深い傷に食い込み、挟まって取り除くこともできない無残な状態でした。

一瞬の出来事、自分の身に何が起こったのか分からない様子の娘は、「足が…。」、一言つぶやき涙を流しました。

「病院で先生が繋げてくれるから大丈夫。しっかりしなさい。」

とっさに出た娘への言葉は、あとで思うと私自身に言い聞かせた言葉だったように思います。娘の競技には致命傷とも言える程の状態でしたから。

4時間の緊急手術。感染の可能性が考えられるとのこと。祈る気持ちで経過を見ました。

手術2日後、ふと娘が私に言いました。

「7月の大会に出るから。」

今までの努力を諦めきれない娘の信念だったに違いありません。

しかし、回復に対する強い不安は続きました。時間だけが過ぎていきました。

受験生のため、勉強の不安も抱えながら治療の痛みを耐える苦悩の日々でした。

娘の入院中の日記には毎日、「明日も頑張る。」と記してあります。

皆さんの励ましを受け、前向きに希望を持つことが出来たのだと思います。

事故から2か月半、松葉杖をプールサイドに置き、泳ぎ始めた娘の姿がありました。

もちろん、十分に泳げる訳ではありません。

衰えた筋力は簡単に戻らないと聞き、一日も早く回復させたいと歯を食いしばり、懸命にリハビリを重ねました。

自分のせいで欠場を余儀なくされた水泳の仲間や、今まで支えて下さった関係者の皆さんに、「大変申し訳ない。必ず自分の仕事を果たしたい。絶対に諦めない。」と。

「娘さんが見えなかったのです。」

加害者の言葉です。非常に驚きショックでした。

何の障害物もない見通しの良い直線道路で、横断歩道を横断中の長身の娘が見えないはずはありません。

前方不注意なのに「見えなかった。」

それは、加害者本人が、自分自身を守る言い逃れの言葉だと感じました。

車は、大変便利な物です。

しかし、ちょっとした不注意で罪のない人の身も心も傷つけ、命も奪う凶器にもなります。

幸い娘は、足の怪我だけで済みましたが、失った14歳の貴重な時間は戻って来ません。

交通事故により亡くなられたり、長期にわたる後遺症で悲痛な思いをされている被害者とその家族の気持ちを思うと胸が痛みます。

計り知れない苦悩のために、精神的に大変な日々を送られている方へは支援の充実を、加害者には適切な法の裁きを希望します。

事故から5か月、今、娘は毎日を1分1秒を大切に生きています。

まだ不安もありますが、病院の先生方に繋げていただいた足で、しっかりと前を向いて進んでいます。更に精神的に強くなり、新たな目標を持った娘は、必ず奇跡を起こしてくれると信じています。

今日も、あの日と同じように練習へ向かいます。

全ての方に感謝して、交通事故ゼロを願いながら。